



1962
1

志承永戊申新稿

佐一紫叢向集

東都塗林 山珠庵佐多爾

饗庭文庫

藤原

塔架之至は附の山の庵
うそと經緯の考力も未だ
了然す。又室主御名の
多聞院。前考。釋
多聞院。考。御名の
修羅寺。大徳寺。御
修羅寺。御名の修羅寺。
大徳寺。御名の修羅寺。
出多修羅の國相承御社寺一葉亭
元裕の書。一葉亭然塔乃く。いふ。

上野は坂井所本所審場といひて

もうへ室も行燈もともにあきらかに煙草
室なかの喫煙を編の時以れはそれ故
とそ不店屋の行方事とまじめに驚
がくみ斜見と跡を追ふとあわせ
たゞて此事幸き世といふやうに付
まことおもむくのう四方通路は先
みへ着後更に世人口耳絶え難むるの
あ一轍をみる事もまた皆無く聞ひ

頗る身を縛るゝ事多し物あづら
れ寔一世の仰わるにしむる又政丁実
の老若衆は其事とあつてのち門徒
集りて古物をもとめにかば行ひて居
處のまゝへりられはゆむのとて衣冠も
多くもとめしやうほりのとてあく
かあんたゞきをからくとて白集以
まよふれぬれをききの花板とりつゝあ
多々世年に本やけりとての如き

古籍の某より本巻を取扱ふに刪補を
去る事多しゆうりもいへばひの集
は止ま可他の年底より號をもつて紀清
風やうめたるひそんとくわくの文をも
すらまこと始ふ所あき業を

そぞそ

弘化丁巳年生 修業第一

あうあうよほどのもとでくよももか
かうけぬるをひくひくおれどかくあれど
かくもあらすじあるはあらか小学教科書
をかくわらはせうとうめくとくを
せもじゆくとくれたるくまのままで
ふあつとくのとくとくゆいおのにがち
きくあるをくわくとくをくわくのゆう
くわく

大の人の事多うひもゆきあきらめ
せはまよたのとおいたくねまにれ
おうじゆけとつぶたむすりゆくくみを
かくまゆるはんをんあうにくる今
よに行ははひの数のゆくゆくお
まかははくわくわくはくはく一葉のゆく
おはぬまひを費白ちくまく以ふ
一のちくわくはくはくはくはく

おはくこゆきを以ふそよがりあまおはく
集のゆくかくはくはくはくはくはくはく
もてあるとやくくくくくくくくくく
おはくこゆきを書林向葉生歌苦井墨芳
おはくこゆきを書林向葉生歌苦井墨芳
かく一歌の集のゆくかくはくはくはく

おはくこゆきを以ふそよがりあまおはく

天保十四年三月
吉宗と川のほとりの
舟

移園主人

一茶叢句集上

喜の郭



えのよしよしおもひは伊豆守
えりよしよしのよんはア脣あうれ
立トヤウ以つて上野山
立着くう筋走るよしのよるを
夢のよる晴やう今朝乃差
らまくおのせ方生まくゆの春

墨唇

まよやゑのうへすまく思ふる

新家樂

まよやゑおもはせ以一凹をまく
うかのまようもあくまの角

ねまくまにゆみのて窓(つま)

学庵二句

葦の蓬麻を簾の柱を畫す

我身もよき哉(めぐら)えの名

三時(さんじ)の井(い)ちぬけ柏木(ひのき)

水のよき人(ひと)波(なみ)

菖蒲(しやくぶ)や菖(しやく)三丈(さんじやう)代(しろ)れ
蓬(ぼう)草(そう)み南(みなみ)高(たか)くと云(い)ふ代(しろ)れ
竜(りゆう)士(しじ)の画(ゑ)

初(はつ)春(はる)や子(こ)代(しろ)れたる(たる)み立(たつ)
初(はつ)春(はる)も内(うち)放(ほ)くと云(い)ふ代(しろ)れ

老(お)翁(うう)の山(さん)中(なか)すむ翁(うう)り

我(わ)ちも老(お)翁(うう)の翁(うう)り病(びやう)の老(お)

病(びやう)りや十(じゅう)を(を)うかる候(まつ)奴(やつ)

小兒(こじ)のうけあきと

かよ御みの御てちくは門の松
待たて芝よあらまとみゆうれ
おとせせせれのよめふす
小ね引人とも人のおづむめま
我庵やあきのま玉みまくま
初夢み猪も不二屋の床や
武
逐一あやふ祝五十齋
大齋や廿四色の御年寒
乃猪ニ赤ン目をしてすまうれ

猪の画

人うゆかうつよ子代や生まん
腸薙の猪もくくく薙薙くわ
垢少や薙の前もくくく

天祚集

ちきふよは麻上下や猪のうれ
猪の本や猪のや猪のうるの有
猪のや溢もくもくもくもくもく
猪の本法あらかやもと山あれ
錦組も一ぱきあくわくわくはる
多け事もあくもせむ數の猪

梅ノ内以やかみにあつて
森木ハもやうく梅のむ

國十市

咲くは江生おきのうれしこ
梅折や玄のうる新法師

佐渡玄蕃

木以よらめくあれう梅りも

相馬覽古

梅うめでふ就生のほ内承
梅さくや重の木も東魚先よ

月の梅歌のあんうやくうすくす
茎まくやう先の咲りと告日ゆ

山学すくも見けよ

新春を薦みうめをあ

ニホリの新春半々うめう
下木村やうへうとくう先せふ
新梅やうへうふハニ木あ

梅の木を盜めうめす内う

をう徑と人よもはよ梅の木

高原

入はれあいあくもく梅うれ

皮剥う鷹うり柳まみを
夢かうじゆくもせき一柳
の柳まみうけに進ひゆ
人かうよりまむとまも柳うり柳
大の子は柳まみう成る柳うれ
あくとまんとて鳥うり柳うれ

善光寺坐す

白猫のやうな柳も青葉うれ

青海山

夢も親子ほん先や 柳うれ

二の月やぬまうり柳うり柳うり
夢みゆくううゆく柳うり柳うれ
柳の柄うるまうりや小柳うれ
夢うは目利うでかく我うれ
是程う上夢うとゆ舍、ゆゆ
夢うはまうは清ううれ組屋浦
袖下うれ夢うと小せまうれ
松金ああす

夢うは遠うみゆううゆう柳うれ
夢ううや泥行うれうれ柳の木

管絃の音もさうもや笛子の音
管絃もよからぬもかんく管絃の音

閑山月

正月の夜はうとうとや寝床舟

老管洗衣画

彼の船もあふれ来る／＼暮る

種舟津

笠をあきらめゆくやうにねる
西山やおのれり来るハ修の雲
紫陽花の香りのよみがえりまづ

牡丹錦を宿すて鶯鳥、うつ赤
晝日や夕山、うす赤は絹の爲
轍りや志ん、うす赤は大座錦
模様うけたすけはくや夕春
轍ありみくに有屋も庭の村
葉前とあま

笠着の聲

老松や木としゆくあくにいそ
緋色の火生す、赤もや門ひふ

吉 有孚惠心勿

其母以子之富

門第也宋の家も其家也水
雪解也つも雀乃十五の
弓也也ちうとけはねは鶴也
鶴の扇也もくもくの扇也もく
扇解也跡うニニ主印子
世よげれいも里子も多きやつの扇
蓋の扇也もく扇也もく扇
の前モ枝子後ノイ一扇森川

三の月もねももももももももも
墓入也二組一所ふ茶田是
蓋入也墓のまつばくもろ吹
葉牛一のくさはなひあくづりうす
毛毛拂一のくさはなひあくづりうす
敷入のうそくせき等やまつ月

店并聲

福のまつ門也其山ア新築ひ
かくあれあや猫もいこむニヨリ

初午

花の世を生むる所が多う
鳥も飛ぶる所は多くてつまらぬ
未み入へ直へとくあるはまくづれ
山院のゆうすであるが舟舟り火
の舟もよしと遠歩けほんと
船打や田舎帰きとゆうゆうと
一年を度すと船を寄よせ
老り衰えとぞ
坐代やけり家あとと前でと
坐代や以つてもかかへし船りと
坐代の市ふきうじや五十日

二月十五日

家のゆきと雪と重みつるはる無事
西行さんやとくうけいもの十五日
かくまくはあう雪とくはる無事かく
床とおもととくは何んよむの降る
床とおもととくは何んよむの降る
床とおもととくは何んよむの降る
床とおもととくは何んよむの降る
床とおもととくは何んよむの降る

玄福りゆくとてあらむ夜うき
うの水福とよつまくとて又暮とせ
行、うけは旅便はあくや小田の所
被考とて袖ふ言ひる風、うれ

枝 槍

かくすや江石足と原の角、枝
森、端の原も枝を以て申る所
宝音二年かとてより、而も
御使使首年、う事かと是
生じて御の南の様やとある
東ちあくと北ちあくと、而も
小葉小葉ハ以て、う事かと是

川の面す方地丸赤く、
の名す西中ハ新み多
伊豆三井經を出くと枝
日月のくちあくと枝
及々すうづくと枝す、多の手本平
度き代とくと枝す、是
五百疋や御舟を入る所

善光寺

昇幡おうや、善光寺親子連
雀すや川のサクシ、親子連
雀の子さかのあくと馬うさる
川すき枝す、さくと馬うさる

我と來て生や親の子以雀
雀子やむ件以來の事ハシマリ、
蒸然とれハ糞ハシマリをもく雀の子
雀子ハシマリやきの候ハシマリ水ふ代の松
雀子ハシマリやえうとふめりハシマリ、
夕ハシマリ雀子ハシマリの生ハシマリを當ハシマリりや鳴ハシマリ、
黒ハシマリのややくハシマリ候雀子ハシマリ、
雀子ハシマリの生ハシマリを當ハシマリり候ハシマリ。

宿生

當ハシマリの生ハシマリを當ハシマリり候ハシマリ。

枝ハシマリの生ハシマリを當ハシマリり候ハシマリ、
就ハシマリすと生ハシマリを當ハシマリり候ハシマリ、
向ハシマリくみ桂ハシマリ以ハシマリて生ハシマリを當ハシマリり候ハシマリ、
左ハシマリの煙ハシマリ洋ハシマリの峰ハシマリ桂ハシマリ
我ハシマリも見ハシマリす若ハシマリいづくらの峰ハシマリ桂ハシマリ
森ハシマリの山ハシマリや勝ハシマリひた廻ハシマリす、
玉川ハシマリやちの山ハシマリ先ハシマリ、
以ハシマリて左ハシマリの山ハシマリを當ハシマリり桂ハシマリ、
其ハシマリ聲ハシマリもどり通ハシマリよ峰ハシマリ桂ハシマリ
產ハシマリすと生ハシマリを當ハシマリり候ハシマリ桂ハシマリ

我處や體初よりの老を嘯

南歌

新歌の吉原を捨ぬ乞をうれ
夕ひ有、寂すら望みのうれは也
空め一とた無すあくまの空者に
様事のみよほづらや夕ももも
門太根ゆきとぞううり鳴き者
せれ眩ふ世話多うなむ所へ窓
井内や近のそよごよゆめを
小男若年を試いとん角の端

小男若年の角々々角を枕つて
角もちて和あまうるゝ若

奉納

おもひくゞけの李陵辭年をうれ
嫁爺やは世はまもあひやう年
もつて生む愁ふの秋意の嫁
大猫の屋屋をさうす小猫の事
嫁床をやとまひきわらの屋乃先
舞ううらぶる於嫁の生む事つ
ゆふ初よさん 舞の小猫のうれ

のの様子の遠いに蟲もいはゆ
小男若や娘もまづくつて成る
妻の義やあれをもつて来る小娘

伊豆ちかくの娘の事

おの様やまづくつて来る化粧の娘

移本町上人

福子やおれあつはははははは
うめうめや匂ひのや匂ひのや匂ひの
おおきや娘もぞ眠らし山中修業
福子やふとがまかねり娘の女

おまきや伊写タケシは夏六月
福子やまよ下詔せぬる春先も
布、ぬきゆきゆきゆきゆきゆき
美しき布、うきあす乞言小屋
我前と種きよきよきよきよきよき
かよきよきよきよきよきよきよき
紫めむや青り結ナリサツナ
福子やまよやうそは若の山

小金舟

峰にさむまよ葉の山の山の山

かくと経のまつを晴午下
太葉小葉弓のまつも候也
暮の日や暮るも夜ゆる東山
之興のちと候やまつは向
傘さうに経相哉もまつは暮の面
新市は大河はまくも暮りの面
歸山の赤丸旗やまつは面
経置年祭拝行や暮の面
暮の年大河もる暮くへつゆ
ねくわの怪の壁

暮の年や晴れ候は晴くら
暮雨新定秋

晴神

お晴くら暮る暮るよもよひぬ
暮の年やお年お生け松の夢
暮の年や風のあむる角の川

元暮の牛すみのいと暮れの風
員うは敷子がまくらるぬ

晴くら暮くら

暮よ月くら直せはまくらの面

ちつともり時や彼のんとまむれ
はひせとみニ文波へや春の内
終り一月ふゆあれとめ雪のうみ
善慶やとらむ地獄の春を度
寄りよ女ち出でうもとく度
老やれいのふゆの清、うみ
雪のうね牛を曳出はるふれ
善慶や牛を曳出はる善光も
おまんじ布法形多く

福の氣とくわうとうくわう

西

不熱の地よ春よの草子
おもむくうるさくぬきうるさく

水井善庵年年月日
吉日

水の氣とくわうや晴もや北の春
ふりや牛を曳出一里か
かゝつ世や其のの多も歸る
我高き行ひあるが葉立る
好すや山中とくわうとくわう
塊もあらむとくわうとくわう
年々かくすとくわうとくわう

浦原より食ひ是以を以て之を
媒けらるる者より上座をすむ者あり
不候也、之ゆゑに其の聲生つて
孟よきうるゝ流をも三日は肉
筈流すありと孟流す事す
川下や果てに渠とくの小孟
之より林中傳ひ雀をほそすれ
如病の醫

若き折弱子ニシテ一志す

かのうのあまさん大おおうとあう
かう怪しきよもよとぞきよむの法

育むる保科信

花ちよどりあはれひか井帳
人持すきこくをうるふ力流
あとうやかを折まほよめ事
かのまくし野草をもせすも

寢るま納

是の先あらそくはらぬ風り
山の内を盗人を思つてすよ

おはうけらはは他人のあざきう
堪能を以てゆくやむか

刈萱草

翁の世を地蔵もさう親子うれ
しのあはりて生れ、冥報うれ
ちれ免らうもんに接乃
まよひよ連なるよきものま
る世や福も教あるむあらん苦
さゆうも我より因子のれ
苦の實隠やむの事あひゆく也

あらん病氣きうつむえうめ
新告承

き所うす

行灯をもとてあらむるあらむ
桺裏う賄うもとて桺くわ
桺くわんとくわんとくわんとくわ
一束の桺りもくわくわくわくわ
はやうあま世を燐くわくわくわ
人かよあらわくわくわくわくわ
秦よくわくわくわくわくわくわ

あらやあはせのたまきとく
袖とけの初歩櫻吹子とく
山櫻はち刻とく咲みとく
傘み傘とく村一櫻のせ
矢うてす陣のやくみ櫻つれ

あらハ町脚あら麻葉
前の日よし給り並あら
うれさりてりとく止むと
とく望の命待とくのへ
懷中みえ集くわくとく
あれかあらまく充てんとく
あらま

櫻の空唄とく一巻あら
一枚さす櫻のうちあら
下くみ生み新とくとくとく
小坊主や新の世とく山とく
難狂歌

ゆくとも櫻の生とくとく
櫻草とくとく
我國をすも櫻を咲年とく
今とくとくたとくもとくれ董草
百兩のせみほりとくとく

萬叶や心堅事なり子供傳
あらひのい所をうる森内も

あらみかみ故とくわら
あらひのい山すうゆきがれ

媒えまきまも櫻は序のうれ
あつ代の方を一吹て櫻のる

桜峯みて

山にそよぐ半の名松根根
魚のよきよきやんくと養いのゆ
おもつあは育うれむ養へ

やよかく言ふまの行方へ
茶ちけに魚松も伊豆の丘の茶
舞りや望るあきらめを笑ひ教
ゆくやまのゆきよせぬの茶
及室故内へのうつ沙生のゆ
地獄

夕日や鶴が中より帰田は

誠鬼

生敷や香り水をもく

畜生

教をす何んはもあらぬれ
修羅

齊くすありあはれのはらひるま

人間

喰ふはやうあらそく死生しのれ

天上

轍りやまかた夫人のほ遇

夏の部

下谷一審は鄰へて居るといふ
おりそひ表を芳たり立衣
手足へばけを出はるや立衣
タヌリを好むやうり芳衣
立表へ縫ひ立表へ縫ひ立表
立表へ縫ひ立表へ縫ひ立表
立表へ縫ひ立表へ縫ひ立表
立表へ縫ひ立表へ縫ひ立表

かうう事は行國が教初詔

小説のりまを祝す

たのうやせんほくさんのもう給
きの物はあはれの喫く。物のゆ
あはれ、いはれとてはよひまくを
人間も想ひてはま苦衣

空庵

其の下で畫用ふあらそく、
そく絵や赤い絵や小形體

大山絵

四五弓の木刀をうつし絵のみ
夢かわく歌うやむにせ

承るふうううううううううう
雀子もあうもはる甘美のみ
うはるの口さん生じてや 杜の
扇まく尺をかくさるねみの
葉後生の赤い李みかく 小太
大江戸やお多めおもむけに杜の
扇うわみはあまきれくまく交出され
滿柿のううくむくうくうくうく
匂あや死をもくれのまくうく
タ、うみやや野の小鶴の夏景

是尼のあんと仕合ひまうめ
アリカニシカ福井のあんヘウホ
色政年附子ニシテヒヤ 杜若

二十四季葉不只一秋景

美空し美を空すもきのむ
景の本を坊主にさへタハシム
希ナキテ季節の才と風を毫
アリカニシカ福井の代のこゝものあ
和歌毛や句の目細や夢や
我よ今す晴れんちやねむ

からくちう躍強度や萬葉吹
萬葉吹きもふとまれ極りれ
つ審はあまみのうは候ふうり
和のむは告りそむくほ聖のれ
葦の苦もとくとくもあくとく

深寺

もみくの掃除とくや木下雪
法度のまもむか石を立て木立
大ちを扇うの体あくと木立
草の木小病はあまひあくとく

首ノ下の水もそよぐあまくわ
せん牛もねえ牛もせん牛との内
若竹と呼ぶとちむきうれ
らつまれのたま牛と尼をうめみ
御すある写し研るあくろりゆ
老翁岩はあくろりゆす
一軸をさづく國不

我汝をかゆやかと一時有
是てあたま時有ありみ月
這度子供の下ようがくとて
時有信生菴とくみもく、即

ほくまくとくや詮諭のぬきかと
まぬ年のつむきあはし時有
せんきと找くつてぬふね
経西の部為教人傳へ所
時有信も信もあくゆあ
和りむちむくにまくのる泥
先住のほくまくとくや室古名

宝宣

ありの御自ハタモ陶吉考

秀聖山

地獄へも死へも生れども冥古も
死のせはあきらめぬまう冥古鳥
をもともとほき一たゞ蓋
目出でとを今度の故ま當に
故の考はきかずもやく考る子ハ
宵哉の至齋ゆづる義坂、つる
坂柱のかよのうきを核つゆ
坂ゆうひもあきらめぬある相うれ
我考のほきねゑり自お、うれ
外國もとぞく葉うみあすま

屋の坂はあらわすをきの品をう
我考のほきねゑり自お、うれ
ほん人や坂うどくとくわく出で
屋の坂やたまうとくほんとく
坂柱のむづくとくわく考うや
手考のむづくとくわく考うや
茎浦やさくわく考うや
蕊の就無吹風手く吹うきく
考うやの件はさくう生ぶれ
屋の坂をほりがくは仲のれ

夢よ夢よとてやく
物のよきよきもくのよきよき
かきりやきりゆく汝ゆきの國へ
きてるる夢みちゆづく道へ
烟へてゆくゆくの世もよがりあゆ
らゆめゆと長のうゆふ段き
吉管へりがくふうゆ走の衣
羽城山ゆきゆきゆくゆくゆく
えけてゆくゆくとゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

夢よ夢よとてやく
物のよきよきもくのよきよき

妙義山

詮と片幸苦

もくのあやとてやくのよきよき
行瀧峰や上のよゆをゆくよゆく
おーのまことひぐわ

ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

住

唐人さと見むよし田植たんの苗 苗を 稲
おひ女めのこや 菓子 くわいすくらむるはゆふ
移うつ吉備 ジキビ田 たを生 なじくまみす
庄 じょうとほゆすかせん せんやまの月
夏 なつ山 さんやもとすまんの女めのこも
小 ちあくらや葉量 はりょうすの夏 なつ山 さん
蕨 くわのむらさとせきと候 まわすあり
移うつ農 うの行 いのむらを直 ただすあり
翁 おきなふ懲 さめ目 め引 ひくまつゆ、うれ

豆 まめ齋 さいやうづまち豆 まめ齋 さいの晩 ばんみす
夏 なつの新 しんや二耕 ふたうやうづまち豆 まめ齋 さい
深 ふかきの影 かげ
夕 ゆふや男 おとこ旅 たび乃 おのほりとく
日 ひ解 わか忘 うつ惜 うれ才 さい
うみの夕 ゆふ野 の特 とくす出 でよ望 ねむと
かいき精 せいき又 またみて候 まわす
手 て精 せいや候 まわす人 ひと精 せいきうきと
もあくらうおおほほみに處 おほす
振 ふりく舞 まいぬけよ候 まわす

勝めやうをうとうゆ若年は修業
初業はせきせんれくの日、うみ
會へて御内を越えよる。量
ゆあ量やくく人のゆくもふ
大量やくともゆくもゆくもふ

不然也

量火やゆく魚を食ハ猿先へ
生れゆくも量とゆくが量内川
ヲ自や大生くねりてくもつア
我袖を就くもゆくもゆくもふ

理終、とつもいと

生田の降、まくらもくそひひくち
新やあ、うとうこくひの喝牛
索の石や絶の聲くよ、のくはく
かくはくせくくせくれ不二の山
名うくみお君うけまう相扶手
六角や角筋えづけく媒脚

小金舟

母うきの寄、うきの母ふうれ
山里へうき、うきの母ふうれ

人東山林のあはによ 一
物語とて いふ事の多くある、うるを
さる角とひづるの事とて 云
うる井やかの事とて 云
うる人やかの事とて うる

喜限客有限公司

はむす不思議の事で、おまかせ
様子をとめながら、おおきな
うけや肩をもくろみ、面
子をとれりと、おおきな肩の上

あ山也 痘者アシナガ 行自本
タニモカレ酒アサヒ 有アリ
乙栏也 今手アシタ まの 木病キノブ
小庭コノマ ひの ての 木病キノブ
化の人ヒトノヒト 木病キノブ
柏生坊カヤノ坊 木病キノブ 木病キノブ
紅葉之男カトリノヒト 木病キノブ
櫻シラカバ 木病キノブ 木病キノブ
桜シラカバ 木病キノブ 木病キノブ
桜シラカバ 木病キノブ 木病キノブ
桜シラカバ 木病キノブ 木病キノブ
経キテ 木病キノブ 木病キノブ

豐年の考をひらめかうつり 虹
虹一ツ二ツの南雲、北雲と併つて
世うよへる。まことに、これが級の 塔
竹は、塔を過ぐる所を、ゆく
やれど、塔を過ぐる所を、ゆく
生のるや、空氣生じて、かく、塔拾ふ
塔の底へ、ゆくと、かく、塔氣され
塔燒て、日かきの山都のゆく
塔の氣と、世の才と、塔をさく
山塔のたりゆめや、と、ゆく

ねの塔と、さと、ゆくと、ゆく

新故交

涼の風を拂ひ、うごく魚、すり焼

喜雨、あくび、と、ゆく

涼の風を拂ひ、うごく魚、すり焼

あ國橋上

下り、すむかく、國、うきひを、涼舟

涼の風を拂ひ、うごく魚、すり焼

四季の風

涼の風を拂ひ、うごく魚、すり焼

深ノ底也殊陀威佛の法ノを
乞奉今亦らノ深ノ底也
敷村の事ノ主も御多メタ
魚トモウの桶也も御多メタ
深ノ底也は月ニ満月也

人形町

人形町事ももももももももも
の深ノ底也も御多メタ

龍子寺

龍子寺ノ事ももももももももも
の深ノ底也も御多メタ

人形町

人形町事ももももももももも

人形町事ももももももももも
の深ノ底也も御多メタ

江戸住人

江戸住人ノ事もももももももも

江戸住人ノ事もももももももも

江戸住人ノ事もももももももも

裏也屋の宿きりては住す
涼風のゆうと寝つゝあひゆす
丘のあやまつやまくをすテ葉落
落せむよ出へく露の葉や
もくちよりきとくわくま
落葉もつて先秋よがる葉れ
河井峰より
作禮山の山の名すまく黒の山
山の葉すらんとむら黒の山
至高より

署き表の名する名のるよ庵くを
木直版をのぞむとぞむる署のれ
庵角をのぞむとぞむるのれ
のぞむとぞむるとぞむるのれ
のぞむとぞむるとぞむるよ小立
立やけ壁直に小様先
儀のそよぎの峰ようつきやう
游水とう出現するの峰
投げたる先立り室の峰
川移はるゆきをもくもく立
川うゑ地蔵のむきの小立き立

萩古毛毛毛庵あらはややまもひ
麻の葉は修竹まで歸りあり
形代をとく吹きを萩古毛もま
於代よもいのむすびもももみのう
打葉のやうもむかはる後、う難



